

消 息 文

○ほど近き友を招ぐ

川本町 岩代須賀 服部水仙子

夕方里なる乳母より落栗あまた送り越し候まゝ、今宵速栗のまどるを開き申べく候。復習もすみ給はゞる湯あみかたく、お出下され度、今晚の風呂は白粉に候。何となれば私も手傳いて汲みたる水に候故。弟共は只今ナイフとぎに餘念なく候。あかくと障子に候。何となれば私も手傳いて汲みたる水に候故。

(評)興ある誘ひ文かな。

○都の友へ返し



數々と都の御自慢、妾よりは田舎の有様申上候。朝未き庭に出れば芙蓉花、先づ喜び迎へ、秋海棠、粉草等皆招くにて候。苔青き石燈籠の下なく蟋蟀愛らしう、鳳仙花には早小蜂の訪れて候。野に歩み運べば、草頭の眞珠の露、心地よう足にこぼれ、稻は吹風に促打と矢番へたる畫の如くに候。林には今を盛の秋草、紫に黄、赤、とりくに可隣に匂ひ、根本の蟲は面白に裂る許りなる、扱は甘藷などの熟したる、農夫の鄙歌、張バツと飛立つ雀の跡追うて畑に到れば、枝豆の皮、張うつれる灯影に早や煮え立つ音も聞え候。早くお出でなさるべく今宵の味は、御好物十三里半の比にあり間はなんどのお勇氣出で來申べく候。それもお出での上、お味ひの上、自慢の真價を知り給ふべく候。

候。樂しき夕餉済せば、廣き庭に橡臺持出し、房々たる軒の葡萄味ひ乍ら親子兄弟姉妹の笑ひ話、誠に氣樂に連も都人の想像にもちよばず候。田舎の有様斯の如く